

江戸期の上野地域における行楽空間

—歴史地理学からのアプローチ—

Factors of Tourist Space in the Ueno Area in the Edo Period

: Historical Geographical Approaches

洪 明真*・太田 慧**・杉本 興運***・菊地 俊夫****

Myungjin Hong Kei Ota Koun Sugimoto Toshio Kikuchi

摘 要

本研究は東京都台東区上野地域における行楽行動の要素を歴史地理学的な観点から検討したものである。江戸期にわたって刊行された名所案内記の挿絵と錦絵を用い、これらの視覚史料に描かれた江戸期の上野地域の描写対象を分析した。江戸上野地域は、新しい都市となった江戸を象徴する建造物を建設するため、地形的・文化的条件が合致する場所であった。そして、為政者による江戸の都市施設と遊覧場所として計画された上野地域の「東叡山」とその周辺には、当時の人々の行楽行動が現われていた。江戸上野地域の視覚史料から描写対象としての「人的要素（女性）」と「物的要素（衣食住関連の商業活動）」に注目したところ、江戸上野地域における行楽行動の要因は「東叡山」と「桜」は江戸上野地域における行楽行動の重要な要素となっていた。

I. はじめに

1.1 研究背景と研究目的

江戸の都市空間に関しては、歴史学、地理学、都市学、建築学などの分野で空間構造に着目した研究が膨大に蓄積されている。江戸城下町の成立に基づいた町人地・武家地・寺社地による土地利用、街道と水路の都市建設の計画、江戸への旅と江戸名所からみた都市文化、江戸の商業活動など様々な研究課題が取り上げてきた。例えば、矢守(1970)による全国各地の城下町絵図から都市計画の類型化と変容による近世都市の形態論に関する研究や、江戸の経済的空間の土地価格の分析から主要街道との関係、町人地内部の地域的差異を明らかにした研究がある(玉井、1977)。

また、江戸の寺社地に関しては、江戸城下町の成立に基づいた町割と地割、空間的利用と変化、あるいは、居住空間の居住者と所有権に関する研究がなされてきた。江戸における寺社地の土地変化に関連した研究で、田中・古田(2010)が、明暦大火の前後に作成された「寛永江戸全図」と「明暦江戸大絵図」を比較し、寺社地・武家地・町人地の立地移動を明らかにすることで江戸の土地変化について考察を行った。そして、現代の上野地域における居住空間について陣内 他(1980)が、江戸時代の都市構造をとどめている場所と下町の典型的な地域として下谷地域を挙げ、その社会組織を建物の利用を類型化して分析を行った。

五十嵐(2003)は、現在において東京の下町は観光化されており、その一つの場所として台東区の上野地域を挙げている。東京の下町という意味の真正性をエッセイから分析し、下町は日本のアイデンティティと庶民社会の性格、外国人のコミュニティが混雑している場所であると指摘した。この研究からは下町の意味を説明する際、より客観的な資料に基づいての検討が必要であり、下町の観光化や庶民社会での人間行動や地域形成の検討の上で地域アイデンティティを説明することが課題であると考えられる。

また、現在の上野地域の地域空間そのものを取り上げた研究事例があり(太田, 2017), 上野地域に属してい

**首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 観光科学域
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9号館)
e-mail rozong@hotmail.com

**首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 観光科学域
特任助教
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9号館)
e-mail kei_ota@tmu.ac.jp

***首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 観光科学域
助教
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9号館)
e-mail sugimoto@tmu.ac.jp

****首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 観光科学域
教授
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9号館)
e-mail kikuchan@tmu.ac.jp

る商店街の業種構成を分類・比較し上野地域が商業集積地であることを示し、その過程の究明を課題とした。

歴史地理学分野における江戸の行動文化の研究では、金子(1995)では、『江戸名所図会』に記載されている656の挿絵の行楽内容を分類しており、江戸における庶民の行楽行動は寺社地を中心として行われたことを示した。さらに、古田(2014)が、江戸周辺地域の寺社参詣の「六阿弥陀参」を取り上げ、江戸期の諸地誌書の記録および挿絵を比較し、「六阿弥陀参」は当時、為政者と庶民の行楽行動として認識され実践していたことを明らかにしている。このように、近年までも寺社参詣の関わりで江戸の行動文化を物語ってきた。

しかしながら、江戸で身分を問わず行楽行動が行われたとされる寺社地に関しては、寺社参詣以外の社会文化的な観点からの研究が乏しい。江戸期の行楽行動とは現在の観光行動を意味しており、江戸時代の代表的な寺社地であった上野地域は、江戸において観光的な性格を持つ地域であることになる。以上のことから、本研究では従来の研究を踏まえ、寺社地であった江戸の上野地域を観光の関わりを歴史地理学の観点から考察を行った。

なお、本研究は、上野地域の空間構造の変遷過程を解明に関連する一つの研究であり、上野地域の内部に関する研究を深化させることを目的とする。

1.2 研究アプローチと研究方法

本研究では過去の江戸地域を研究対象としており、そのためには、時空間的な観点が必要となる。従って、時間科学と空間科学が融合した学問分野である歴史地理学を本研究で用いるアプローチとする。歴史地理学は、地理学的な景観研究として地域における景観変化のプロセスやメカニズムを解明し、特定の歴史的背景における景観形成の諸問題を考察することで景観復原をすることを重要テーマとしている(菊地, 1984)。主に、絵図、古地図、史料を使用し、その歴史的事実と描かれた事象から地域空間と景観の構成要素を究明している。近年では、過去の空間と現在の空間の情報を同時に扱うことから、京都の町並みを三次元的に再現する際に、歴史地理学の理論と方法が基礎理論として取り入れられた(矢野 他, 2011)。

本研究は、歴史地理学のなかでは史料の有無からは「文献歴史地理学」となり、地域空間をどのように明らかにするかの側面では「歴史地誌学」の位置付けとなる。本稿で使用する資料の用語としては、「文献史料」と「視覚史料」の二つに区別し用いる。上野地域に関

する歴史的事実が分かる区史および研究史などを文献史料とし、錦絵と名所案内記の挿絵などを視覚史料と呼ぶ。

歴史地理学の研究では、過去の地域景観を復原するため絵図を用いた研究や絵図の比較研究が蓄積されている。乙部(2002)は、当時の地域に関する知識は絵図に盛り込まれ、その事象から地域の情報を客観的かつ主観的に把握できると論じた。さらに、阿部(2012)が、江戸後期の名所案内記である歌川広重の『絵本江戸土産』と『江戸名所図会』の挿絵を比較し、この二つの江戸案内記に描かれていた風景対象を分類し位置関係を示した。

これまでの絵図を用いた研究を踏まえ、洪(2016)は、江戸期の日本橋地域の水辺の風景が描写された視覚史料を通じて、当時の多様な物的・人的要素を川船から示し、日本橋地域の景観の変容を考察した。そして、視覚史料には江戸期の行動文化や地域景観などが精緻に描かれており、地域における社会文化的な現象が把握できる重要な識別材料となると述べている。

本稿で用いる挿絵および錦絵は、デジタルアーカイブの画像データを用いた。デジタルアーカイブ(Digital Archive)とは、図書・出版物・公文書・美術品・博物品・歴史資料等公共的な知的資産をデジタル化し、インターネット上で電子情報として共有・利用できる仕組みを指す(総務省, 2012)。日本では、東京国立博物館が1994年より画像データ構築をはじめ、国立美術館、国内国立国会図書館、国立歴史民俗博物館、国立公文書館など機関によるデジタルアーカイブの構築および運営が約20年間にわたって実施されてきた。デジタルアーカイブの構築目的は、歴史資料の保存、社会や文化の理解向上、学術研究への利用にあると示している。デジタルアーカイブの課題として、歴史資料の検証とその社会的活用、歴史資料の新知見の検証することと、検証の場を国際的に開くことが挙げられている(日本学術会議歴史学研究連絡委員会, 2000)。

過去の地域空間に関するデジタルアーカイブの画像データを利用することは、以上に述べたデジタルアーカイブの構築目的と本稿における研究趣旨と合致しており、尚且つ、本稿はデジタルアーカイブの課題の活用策として意義を持つ。

1.3 江戸上野地域における史料の吟味

本研究で用いた江戸上野地域に関する視覚史料は、都市景観図の系譜を受け継がれてとされており、江戸の名所案内記に収録されている「挿絵」と「錦絵(多色

摺木版画,以下錦絵と呼ぶ)の二つであり,うち約120図を対象とした。

錦絵は,遠近技法と陰影技法の西洋画法を受容し,歌川豊春(1735~1814年)により浮世絵風景画の「江戸名所絵」といわれる江戸特産の絵画が生まれるようになった。その後,広重と北斎の風景画により天保年間(1830~1844年)に全盛期を迎え,鮮やかな彩りの革新的な絵画技法は絵師のみならず当時の庶民にも大いに受け入れられ,江戸の特産物にもなった(洪,2016)。

本研究で用いた錦絵のタイトルは43点であり,そのうち5点が3枚の構成となり合計53図を対象としており,22図が初代歌川広重による錦絵である(図1)。



図1 江戸上野地域の視覚史料の例 錦絵1

(注:1. 初代歌川広重作「東都名所 上野東叡山全図」
2. 国立国会図書館デジタルコレクションインターネット公開資料 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1302538> により一部改変)

名所案内記とは,江戸についての出版物であり,江戸の地理的な情報を取り込んだ地誌である。慶長19(1614)年の『慶長見聞集』の初期段階の名所案内記は,最初は見聞録に近いものであったが,その後,地誌的・実用的な性格が加えていくようになった。

本研究で使用した名所案内記の挿絵は,以下の通りである。地誌の萌芽とされる寛文2(1662)年の『江戸名所記』(図2)・延宝5(1677)の『江戸雀』,実用的な名所案内とされる宝暦3(1753)年の『絵本江戸みやげ』・明和9(1772)年の『江戸砂子温故名蹟誌』,江戸名所案内記の集大成とされる文政10(1827)の『江戸遊覧花暦』・天保5~7(1834~1836)年の『江戸名所図会』の挿絵である。『江戸名所図会』の挿絵の約50図と,上に挙げた名所案内記の挿絵18図を対象とした。

これらの名所案内記に収録されている挿絵には,江戸の市街地,年中行事,人物などの事象が日本伝統の大和絵の鳥瞰図技法で詳細に描かれている。また,淡泊な水墨画で描写したことが特徴であり,これは,浮世絵風景画の狩野探幽が徳川幕府の御用絵として元和

3(1617)年に仕え,当時,儒教思想を唱えた幕府の政策と呼応したことに関係している(図2)。

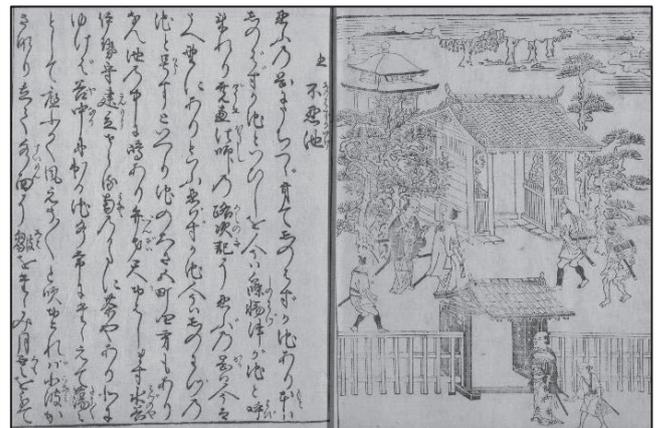


図2 江戸上野地域の視覚史料の例 挿絵1

(注:1. 寛文2(1662)年の『江戸名所記一巻』目録四「東叡山」
2. 国立国会図書館デジタルコレクションインターネット公開資料 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2554337/14> により一部改変)

II. 江戸上野地域の視覚史料による描写対象

2.1 錦絵による江戸上野地域の描写対象

「人的要素」と「物的要素」

従来の研究で挿絵を分析する際は,事象を捉えた視点が重要視され,高所のもの(遠景)や中位のもの(中景)や低いもの(近景)による分類が行われた(金子,1995)。高所より大観する俯瞰図,即ち,鳥瞰図技法は当時に地図的役割を果たしており,この構図を採用していることから,江戸の行楽地や繁華街の指名度や地域空間の規模の大きさが把握できるとされてきた(矢守,1984)。

これまでの研究で挿絵が描かれた視点とは,全体的に捉えた場合であり,本研究では江戸上野地域の描写対象の要素そのものに主眼点を置くため,視点の明記はしない。しかし,描写対象をリスト化した際に近景より遠景に描かれた順を考慮し記述した。

視覚史料の計53図の錦絵に描かれた上野地域の描写対象の要素と登場人物を示したのが表1である。ここで,描写対象の「寺社」は,建造物および寺社の植生を含む。登場物数は識別できる範囲で集計し,人数が20人以上の場合は「多」,人数が20人以下の場合は「少」と示した。

江戸期の上野地域の錦絵に描写されていた対象は,東叡山,寛永寺,清水堂,三橋などの建造物と不忍池,桜,蓮,松,寺社の植生などの自然景観であった。

表1 江戸時代の錦絵に描かれた上野地域

視覚史料名	タイトルの要素	出版	絵師	作画時期	描写対象	登場人物数
No.1 江戸名所上野仁王門之図	建造物	永壽堂西村屋	歌川豊春	1768~1814	町屋敷 登場人物 寺社	多
No.2 江戸八景 不忍池乃落雁	自然	不明	喜多川歌麿	1775~1806	登場人物 自然(不忍池・動物) 寺社	少
No.3 浮絵東叡山中堂之図	建造物	永壽堂西村屋	葛飾北斎	1779~1849	寺社 登場人物 自然	多
No.4 上野三枚橋之図 3枚	建造物	西村屋与八	細田英之	1781~1829	登場人物 建造物 町屋敷 商業活動 自然(桜・松)	多
No.5 江戸名所八景 晩鐘	建造物	高須	栄松斎長喜	1781~1809	寺社 登場人物 自然	多
No.6 江戸名所八景 落雁	自然	高須		1781~1809	自然 寺社 登場人物	少
No.7 東都花暦十景 上野清水之桜	建造物・自然	越長			自然(桜・松・動物) 寺社 登場人物	少
No.8 東都花暦十景 不忍蓮	自然	越長			登場人物 自然(不忍池・蓮) 商業活動	少
No.9 江戸八景 上野の晩鐘	建造物	山本	浜斎英泉	1804~1848	登場人物 自然(桜・松・動物) 寺社	多
No.10 江戸八景 忍岡の暮雪	自然	山本			登場人物 商業活動 自然(不忍池・動物・雪) 町屋敷	少
No.11 江戸不忍弁天ヨリ東叡山ヲ見ル図	建造物	不明			自然(不忍池・蓮) 町屋敷 寺社	少
No.12 東都名所合 上野	地名	佐野喜	歌川国貞初代	1807~1864	登場人物(女性) 寺社 自然(桜)	少
No.13 江戸名所発句合之内 上野	地名	上金			登場人物(女性と子供) 自然(桜) 寺社	少
No.14 東都名所合 池の端	自然	佐野喜			登場人物 自然(不忍池・蓮) 寺社	少
No.15 上野乃桜かり 3枚	自然	ト山口			登場人物(女性と子供) 自然(桜)	少
No.16 江戸自慢三十六興 東叡山花さかり	自然	平のや	歌川国貞初代	1807~1864	登場人物(女性) 自然(桜) 寺社	少
No.17 江戸自慢三十六興 不忍池蓮花	自然	平のや	・歌川広重2代	・1844~1869	登場人物(女性) 自然(不忍池・松・蓮) 寺社 商業活動	少
No.18 東都東叡山の図 3枚	建造物	若宇	歌川国芳	1812~1860	登場人物(女性と子供) 自然(桜)	少
No.19 名所江戸百景 上野清水堂不忍の池	建造物・自然	魚栄			自然(桜・松・不忍池) 登場人物 寺社	多
No.20 名所江戸百景 上野山内月のまつ	自然	魚栄			自然(松・不忍池) 町屋敷 寺社	なし
No.21 名所江戸百景 上野山した	地名	魚栄			登場人物 町屋敷 商業活動 自然(松・動物)	多
No.22 名所江戸百景 下谷広小路	地名	魚栄			登場人物 町屋敷 商業活動 自然(松)	多
No.23 東都名所 江戸名所 上野東叡山境内	建造物	山田屋			登場人物 自然(松・桜) 寺社	多
No.24 東都名所 上野東叡山全図	建造物	葛屋吉藏			寺社 登場人物 自然(松・桜)	多
No.25 東都名所 上野清水堂満花	建造物・自然	泉市			登場人物 自然(桜・松) 寺社	多
No.26 東都名所 上野山王山 清水観音堂花見 不忍之池全図 中島弁財天社 3枚	建造物・自然	葛屋吉藏	歌川広重初代	1818~1858	自然(不忍池・桜・松) 町屋敷 寺社 登場人物	多
No.27 東都名所 不忍之池	自然	増銀			自然(不忍池・蓮・松) 登場人物 商業活動 寺社	少
No.28 広重画帖 江戸高名会亭尽 池之端	地名	不明			登場人物 商業活動 自然(不忍池・蓮・梅) 町屋敷	少
No.29 広重画帖 江都名所 忍の池	自然	不明			登場人物 商業活動 自然(不忍池・蓮・桜) 町屋敷	多
No.30 広重画帖 江戸高名会亭尽 下谷広小路	地名	藤彦			登場人物 商業活動 自然(不忍池・蓮・動物) 町屋敷	少
No.31 三都名所図会 東都名所 上野東叡山ノ図	建造物	不明			自然(桜・松・不忍池) 登場人物 寺社	多
No.32 東都百景 上野晩鐘	建造物	藤彦			登場人物 町屋敷 自然(松)	多
No.33 東都上野花見之図 清水堂 3枚	自然	佐野喜			登場人物 自然(桜・松) 寺社	多
No.34 源氏絵 江戸十二景 不忍暮雪(4枚中1枚)	自然	不明			自然(不忍池・雪) 寺社	なし
No.35 新選江戸名所 不忍池新土堤春之景	自然	不明			登場人物 商業活動 自然(不忍池・梅) 町屋敷	少
No.36 江戸名勝図会 不忍弁天	建造物	不明			登場人物 商業活動 自然(不忍池・蓮・桜) 町屋敷 寺社	多
No.37 江戸名勝図会 天王寺	建造物	不明			寺社 登場人物 自然(桜・松)	少
No.38 東都三十六景 上野満花の詠	自然	相ト	歌川広重2代	1844~1869	寺社 登場人物 自然(桜・松)	多
No.39 東都三十六景 不忍池	自然	相ト			登場人物 自然(桜・不忍池・蓮) 商業活動	多
No.40 東都三十六景 下谷広小路	地名	相ト			登場人物 町屋敷 自然(桜・蓮・雨) 商業活動	少
No.41 三十六花邊 東都谷中撫子	自然	不明			自然(花・松) 寺社	なし
No.42 東都八勝 上野晩鐘	建造物	林庄	錦江斎	1854~1868	登場人物 自然(桜・松) 寺社	多
No.43 東都名所 不忍池	自然	不明	不明	不明	登場人物 商業活動 自然(不忍池・蓮・松) 町屋敷 寺社	多

(注: 1. 視覚史料は、国立国会図書館の電子図書館のデジタル資料を使用した。

2. 錦絵に描写された対象は、近景より遠景に描かれた順を優先し羅列した。
3. 登場物数は識別できる範囲で集計し、その数が20人以上の場合「多」、20人以下の場合「少」と表記した。)
4. 描写対象で「寺社」は、建造物および寺社の植生を含む。

江戸期の江戸上野地域の視覚史料の錦絵からの描写対象は、「人的要素」と「物的要素」から分けて説明できる。視覚史料の江戸上野地域の人的要素のなかでは「女性」が多く登場していたことが特徴的であった。

表1において、No.2「江戸八景 不忍池乃落雁」、No.4「上野三枚橋之図(3枚)」、No.8「東都花暦十景 不忍蓮」、No.12「東都名所合 上野」、No.13「江戸名所発句合之内 上野」、No.14「東都名所合 池の端」、No.15「上野乃桜かり(3枚)」、No.16「江戸自慢三十六興 東叡山花

さかり」、No.17「江戸自慢三十六興 不忍池蓮花」、No.18「東都東叡山の図(3枚)」、No.22「名所江戸百景 下谷広小路」、No.23「東都名所 江戸名所 上野東叡山境内」、No.28「広重画帖 江戸高名会亭尽 池之端」、No.29「広重画帖 江都名所 忍の池」、No.33「東都上野花見之図 清水堂(3枚)」、No.35「新選江戸名所 不忍池新土堤春之景」、No.36「江戸名勝図会 不忍弁天」、No.39「東都三十六景 不忍池」、No.40「東都三十六景 下谷広小路」の19点(うち3枚作4点を含む)に「女性」が登場して

おり、全53図の錦絵うちに27図に及んでいたことが分かった。以上に挙げた「女性」による人的要素の錦絵の27図には、ある特定の物的要素が登場しており、以下の15点(うち3枚作4点を含む)である(図3)。



図3 江戸上野地域の視覚史料の例 錦絵2

(注: 1. 歌川広重初作の「東都上野花見之図 清水堂」
2. 国立国会図書館デジタルコレクションインターネット公開資料 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1307832> により一部改変)

表1のNo.4に扇子・傘, No.8に煙草・茶, No.12とNo.13に衣服, No.15に衣服・扇子, No.16に衣服・食, No.17に衣服, No.18に衣服・煙草, No.23に傘, No.28に料亭, No.29に商売, No.33に衣服・傘, No.35に商売(行商), No.39に傘・茶, No.40に傘が描写対象となっていた。

また、人的要素として「女性」が登場していた錦絵の27図のうち23図には、人的要素と共に、衣・食・住と関連する事象が描写されていた。「飲食店」が描写対象として登場していたことが確認できた。

江戸期の上野地域の物的要素「飲食店」が描写された錦絵は、表1のNo.21「上野山した」, No.27「東都名所 不忍池」, No.30「広重画帖 江戸高名会亭尽 下谷広小路」, No.42「東都八勝 上野晩鐘」の4点であった。

江戸期の上野地域の物的要素「飲食店」に関連したいくつかの事項がある。まず、上野門前と不忍池と池之端新町には酒亭(じゅらく)の類の商店が多くあったこと、延享5(1748)年4月に池之端町が新しく起立されてから、宝暦2(1752)年には江戸町民のみならず全国各地から旅人が集まり、爆発的な需要が生じたことが記録されている。また、江戸における飲食店に関連する史料として、嘉永元(1848)に刊行された『江戸名物酒飯手引草』がある。ここには、会席料理・どじょう・寿司・蕎麦屋・茶漬け・蒲焼など記載されており、上野地域にあった飲食店の所在地が確認できる。これらの江戸において代表的な飲食店のうち、錦絵の人的要素「女性」に関連する業種として水茶屋が挙げられる。水茶

屋は、お酒は売っておらず、お茶のみ販売し昼間営業を行っていた飲食店である。水茶屋では、年齢は若く容貌綺麗な女性が美しい着物を着て働き、この水茶屋の看板娘は江戸においてもその人気は高く、店にいても相当な収入が得られたと記録されている。

江戸下谷地域では、中笠森稻荷門前の水茶屋鍵屋の「お仙」と上野山水茶屋林屋の「お筆」が、当時江戸の人気者であり、その姿は、江戸時代の文献史料および錦絵から確認できる。記録によれば、明和5(1768)～文政5(1822)年の『半日閑話』に「上野山下の茶屋女林屋お筆、元は吉原四つ目屋の抱大隅といへる妓なるよし、皆見に行。名付けて茶がま女といふ。是錦繪に出る。」と記されている。水茶屋の看板娘は、明和2(1765)年に錦絵を創始した鈴木春信(1725～1770)によって多く描かれており、当時の江戸の観光商品でもあった錦絵に登場し多く摺られた。

以上に述べたように、江戸期の錦絵の上野地域の描写対象であった人的要素と物的要素は当時の行動文化を示す指標であることが指摘できる。

2.2 挿絵による江戸上野地域の描写対象 「東叡山寛永寺」

ここでは、江戸上野地域の行楽行動の要因を検討する。江戸上野地域の描写対象の要素は、錦絵と同様に、東叡山、寛永寺、清水堂、三橋などの建造物と不忍池、桜、蓮、松、寺社の植生などの自然景観であった。天保5～7(1834～1836)年に刊行された『江戸名所図会』には、「東叡山寛永寺」というタイトルで10点、その

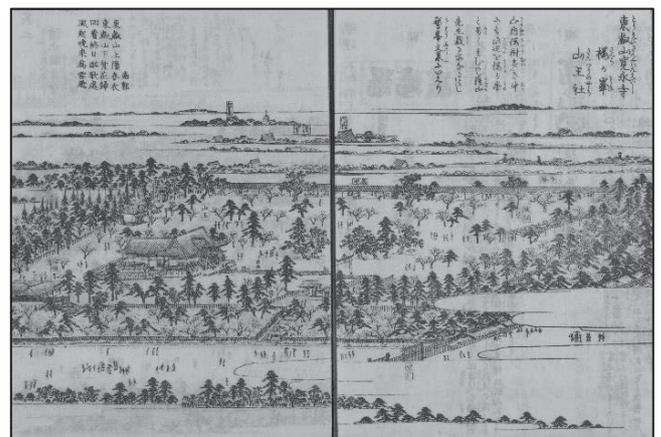


図4 江戸上野地域の視覚史料の例 挿絵2

(注: 1. 天保5(1834)年の『江戸名所図会』「東叡山寛永寺」
2. 国立国会図書館デジタルコレクションインターネット公開資料 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2563393/2> により一部改変)

他、「東叡山」と関連するものは14点が描かれていた(図4)。

これに匹敵するように、江戸で最も歴史が深い寺社地であった浅草地域の「金龍山浅草寺全図」が10点も描かれていた。挿絵の枚数は、前述した鳥瞰図技法の高位の視点と同じく行楽地などの地域空間の規模が把握できることを示唆する。

従って、名所案内記で「東叡山」のタイトルで多く描かれたことに注目し、上野地域の景観形成の関わりを文献史料から考察する。天正18(1590)年8月1日、徳川家康が江戸城入り後、江戸は日本全国を実質的に支配する政治的な中心地となった。江戸上野地域は、幕府の権威を示す東叡山を創建する神聖な場所として選定された。その選定理由は、京都の比叡山延暦寺の模した宗教施設といい統治施設ともいえる都市施設を建造するためには、江戸の鬼門に当たる方向と地形的な条件と広い面積を満たしている場所であった(東京市下谷区役所, 1935)。上野の東叡山と関連している「比叡山」について言及する必要がある。最澄が延暦7(788)年、比叡山に延暦寺を創建し、宗派は天台宗であり、法然、栄西、道元、親鸞、日蓮など名僧が輩出されていた。比叡山は、平安時代より琵琶湖方面から京都の入り口に位置し、京都の経済を左右しており幕府の支配を受けないほどの多くの僧兵の武装勢力を持っていた。しかし、元亀2(1571)年、織田信長との戦いで焼き討ちされ、全山焼失された。その後、江戸が日本で政治的な中心地となった際、徳川家康と天海によって東叡山寛永寺の建造に至った(図5)。



図5 江戸上野地域の視覚史料の例 挿絵3

(注: 1. 明和9(1772)の『江戸砂子温故名蹟誌』「東叡山」
2. 国立国会図書館デジタルコレクションインターネット資料 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2563639/14> により一部改変)

平安時代の日本仏教は、中国仏教を日本の実状に合わせたものであり、即ち、神と仏を調和させた神仏習合であり、仏教によって国を守護する鎮護国家であった。そのため、東叡山の創建は江戸幕府を守護する意味を持っており、街道の整備、市街地の拡大、上水道の建設などの一連の都市計画が実施するためにも、幕府の権威を示すことは非常に重要であった。江戸の代表的な寺社地であった浅草地域が、鎌倉期の「東鑑」の文献史料に登場していることに比べ、上野地域は、およそ380年後「北国紀行」に、忍が岡と記載されており比較的歴史の浅い地域であった。このことは、「古くは鳥穢野と書いて、松や杉が茂って、人跡が絶えたところなので、飛鳥の糞ばかりであった。」とする記述から把握できる。

東叡山寛永寺の創建は、当時江戸で最も古い寺社であり庶民から厚い信仰を集めていた浅草地域の浅草寺と、西国の比叡山延暦寺を意識していたことが記録から分かる。奈良と京都の大仏は大仏の座像、京都の清水寺は清水観音堂、琵琶湖の竹生島は弁天島、五重塔など上野山に模した。この規模の大きい寺社の建造であれば、浅草地域の浅草寺にも匹敵する寺社であることは当然のことであった。

東叡山の建造に伴って寺社地の門前町が起立ようになった。門前町を神社や寺院への参詣者を対象として旅館・飲食店・土産物店・娯楽施設などが寺社の門前の街道の両側に発達した町であると定義している。門前町は地形的位置から平地と山地に分けられ、平地に位置する門前町の場合は、信仰圏が広いものほど交通の要地や経済中心地、景勝地となっており、このことから参詣者を集める要因とされている(藤本, 1970)。

参詣者は参詣の他に観光の目的を持ち、寺社そのものが観光対象となり、その例が清水寺、巖島神社、日光東照宮などである。平地の場合、沖積低地および洪積台地、台地上がある。山地に位置している門前町の場合は、参詣と観光的な性格よりは、信仰、修行の目的を持つ場所であり、位置的にも山麓に多く位置していた。平安時代の山岳仏教と関連しており、比叡山、高野山がその例である。それに、下谷地域の地質構成は、上野台地が洪積層で占めており、下部は第三紀層を基盤としている。一部の下谷の北部には沖積層となっている。江戸下谷地域の門前町の位置的に平地の門前町であったことは、洪積層の地質構成からも裏付けている。従って、上野地域は参詣者を集める条件が揃った場所となったといえる。

Ⅲ. 江戸上野地域における行楽空間の形成

—東叡山の植生と「桜」—

寺社地は、被支配者を掌握するため都市施設として整備され、その後、江戸寺社地と門前町は行楽の場所と発展した(山本, 2007)。これに関連し、本章では江戸上野地域に行楽場所としての要因を視覚史料の描写対象から取り上げた。江戸上野地域の自然景観であり東叡山の植生と「桜」に注目し、行楽場所の関わりで検討した。

『甲子夜話』には、徳川家康が現在の文京区にある慈雲山竜興寺の「桜」をみて和歌を詠んだことが記されており、二代将軍の徳川秀忠が花を愛したことはよく知られている。また、天海も「桜」が好きで上野山に植えさせたことが記録されており、さらに、三代将軍の徳川家光は、天海のため吉野山の桜樹を取り寄せ上野山に植えさせたという。やがて、寛永13(1636)年に、東叡山の「桜」は江戸の人々が鑑賞できるようになり、江戸の「桜」の名所となった。寛文2(1662)の『江戸名所記』には、「東叡山」1枚と「不忍池」1枚の挿絵があり、東叡山の植生として「桜」と不忍池の「蓮」が確認出来ないが、武士や旅人の様子が描かれており、江戸上野地域の行動文化が把握できる(図6)。

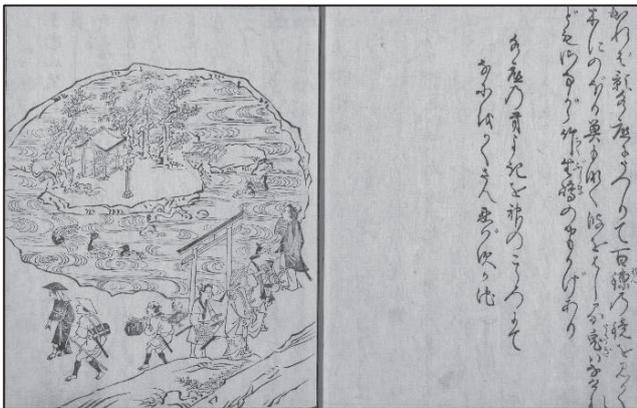


図6 江戸上野地域の視覚史料の例 挿絵5

(注: 1. 寛文2(1662)年『江戸名所記』「東叡山」

2. 国立国会図書館デジタルコレクションインターネット公開資料 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2554337/15> により一部改変)

『江戸名所記』に自然事象としては、「松」と「雁」、その他の寺社の植生が描写対象となっている。また、延宝5(1677)に刊行された『江戸雀』には、「上野」2枚の挿絵に「桜」と「蓮」とみられる自然事象の描写が初めて登場していた(図7)。

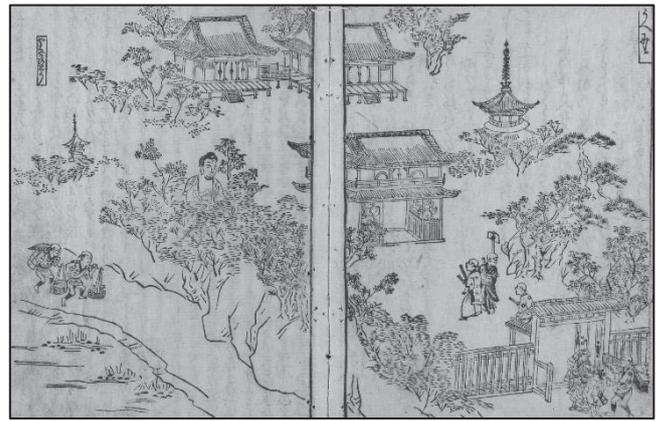


図7 江戸上野地域の視覚史料の例 挿絵4

(注: 1. 延宝5(1677)の『江戸雀』の「上野」

2. 国立国会図書館デジタルコレクションインターネット公開資料 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2574919/37> により一部改変)

『江戸雀』以降に刊行された江戸の名所案内記には、東叡山、不忍池、清水堂などが江戸上野地域の遊覧場所として挙げられており、描写対象も錦絵と同様になっていた。江戸上野地域の「桜」に関する史料によれば、江戸上野地域における「桜」の品種は、ひとえの彼岸桜・彼岸桜・一重桜・芳野桜・犬桜・秋色桜・白枝桜であったことが記録されている。これは、文政7(1824)年に刊行された『武江物産誌』であり、当時の江戸における鑑賞樹木と、その場所が記されている。そこで、江戸上野地域が最も多く挙げられており、江戸において上野地域が「桜」の名所であったことを裏付けている。

天保8(1837)年に刊行された『江戸遊覧花暦』は、江戸で季節別に楽しめる植生とその地域が書かれており、江戸における「桜」の名所として上野東叡山を挙げている(図8)。

このように、上野地域が江戸の「桜」の花見の名所となった理由は、上野地域における「桜」の品種構成であると考えられる。要するに、野生種の「彼岸桜」が咲きはじめてから、「桜」のなかでも開化時期が遅いとされる「八重桜」が散るまでの花見期間が江戸上野地域の「桜」の特徴であった。「弥生末ごろ」の記録があり、即ち、江戸上野地域は4月末まで「桜」を長く楽しめることができた場所であった。

本来の江戸の「桜」は、個人の屋敷、寺社などに植えられており、その数も1本から多くても10本位に過ぎない程度であった。江戸時代に幕府の権威を象徴する地域として東叡山の創建と共に形成された地域、東の神聖な地として形成された場所に、為政者は自然事



図8 江戸上野地域の視覚史料の例 挿絵6

(注：1. 『江戸遊覧花暦』「東都名所 上野東叡山全図」
2. 国立国会図書館デジタルコレクションインターネット
公開資料 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536365/11> により
一部改変)

象「桜」を利用し上野地域を江戸の新たな遊覧場所として造り上げていた。これに反して浅草地域の「桜」は、遊女によって植えられた事実からは、江戸の代表的な寺社地であった上野と浅草地域の異なる地域性が推測される。

以上のように、本稿では視覚史料での描写対象の要素である寺社植生と「桜」を取り上げ、江戸時代の江戸上野地域における行楽空間を考察した。現在においても「桜」と「蓮」の自然植生は上野地域の来訪目的となっており、江戸上野地域の観光対象が持続していることと解釈できる。

IV. むすびにかえて

本研究は、現在東京都台東区上野地域に着目し、江戸期に刊行された文献史料および視覚史料から江戸上野地域における行楽空間の形成要因を明らかにした。本研究で使用した視覚史料は、そのものが観光的な商品かつ要素が極めて高いことであり、江戸上野地域の社会文化的な行動が反映されたものである。江戸期の江戸上野地域における視覚史料の描写対象の要素であった「東叡山」と「桜」から行楽空間との関わりで考察を行った。

江戸上野地域の「東叡山」は、江戸初期の五街道、改流工事など江戸の都市施設の形成時期と関連し、江戸の新しい宗教空間として建造されたことが重要な意味があった。まず、一つ目は、本来江戸で居住していた被支配者に対し江戸幕府の支配を円滑にするためであった。特に、江戸への旅江戸の人的要素が集中して

いた浅草地域から、都市計画上で空間的に分散させたことになる。二つ目は、被支配者の人望は為政者には不可欠なものであり、被支配者に宗教空間と娯楽空間を提供するためであった。三つ目は、仏教の力を借りて国を守護するためであった。

このような人文要素「東叡山」と同様に自然要素「桜」も、形成の当初には為政者の政治的な目的と個人的な興味から生まれたものではあった。江戸中期以降、庶民社会で新しい動向が現われたが(新城, 1971), 本研究により江戸上野地域の行楽空間の形成要因を視覚史料から抽出し文献史料から裏付けた。

本研究では、江戸上野地域における行楽空間の把握が一部はできたものの、視覚史料より客観的な指標から検討する必要がある。江戸後期には、農村・都市を問わず消費生活が向上したことより、民衆の衣食住が全般にわたって豊潤となり、多様化した。これに関連する資料としては、当時の実存人物による記録、社会文化的な指標が分かるものが挙げられる。本稿で江戸上野地域の物的要素に関しては、視覚史料による描写対象要素から示すことができた。特に、扇子・傘・煙草・衣服・茶・食などの事象は、当時の人間行動が把握できる客観的な根拠となる。また、江戸の商業活動が分かる『江戸買物独案内』、江戸の飲食店が記載されている『江戸名物酒飯手引草』の指標から江戸上野地域に行動文化およびその要因を補足することを今後の課題とする。

謝辞

本研究は、上野観光連盟からの受託研究「昭和39年以降の上野地域の歴史の編纂」による成果である。ここに謝辞を記す。

参考文献

- 安藤優一郎 2005. 『観光都市江戸の誕生』: 新潮新書.
有岡利幸 2007. 『ものと人間の文化史 137・桜 I』: 財団法人法政大学出版局.
阿部美香 2012. 歌川広重作「絵本江戸土産」における風景描写の特徴 —「江戸名所図会」との比較を通じて—. 歴史地理学 259 54-2: 18~39.
五十嵐泰正(2003). 「下町」という意味システムの持つ両義性. 比較文学・文化論集 20: 29~40.
市古夏生・鈴木健一 1996. 『新訂 江戸名所図会』筑摩書房.
太田 慧・杉本興運・菊地俊夫・土居利光 2017. 東京・上野地域における商業集積地の空間構造の分析. 観光科学研究 第10号: 1~8.

- 小澤 弘 2002. 『都市図の系譜と江戸』: 吉川弘文館.
- 金子晃之 1995. 近世後期における江戸行楽地の地域的特色—『江戸名所図会』からみた行動文化—. 歴史地理学 175: 1~21.
- 加藤由利子 1990. 戦前における借地上賃家経営について—東京下谷区のM家の事例—. 青山学院女子短期大学紀要 (44): 79~93.
- 菊地利夫 1984. 『日本歴史地理概説』: 古今書院.
- 岸井良衛 1965. 『江戸・町づくし 下巻』: 青蛙房.
- 小谷俊哉・窪田陽一 1993. 旧江戸武家地の空間構造の変遷に関する研究. 土木史研究(13): 405~411.
- 小林 忠 1983. 『江戸絵画史論』: 瑠璃書房.
- 佐野昌巳 2015. デジタルアーカイブの一般公開の抱える課題 文教大学大学院情報研究科 IT News Letter Vol.10 No1: 3~4.
- 新城常三 1971. 『庶民と旅の歴史』: 日本放送出版協会.
- 陣内秀信・板倉文雄・二瓶正史・森 誠二・局 淳資 1980. ケーススタディ東京一下谷・根岸. 法政大学工学部研究集報(16): 127~140.
- 杉本興運 上野プロジェクトメンバー 2016. 『上野「文化の杜」アーツフェスタの評価』
- 台東区役所文化 産業観光部 にぎわい計画課 2012. 『上野・浅草・隅田川 歴史散歩』: 東京都台東区.
- 田中麻衣・古田悦造 2010. 明暦大火前後における江戸の土地利用変化. 東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ(61): 61~77.
- 東京市下谷区役所 1935. 『下谷区史』: 東京市下谷区役所.
- 東京都台東区役所 1966. 『台東区史 沿革編』: 東京都台東区役所.
- 東京都台東区役所 1966. 『台東区史 社会文化編』: 東京都台東区役所.
- 東京都台東区役所 1955. 『台東区史 上巻』: 東京都台東区役所.
- 内藤 昌 2010. 『江戸の町(上)』: 草思社.
- 内藤 昌 2010. 『江戸の町(下)』: 草思社.
- 原田隆史 2002. “デジタルアーカイブの現状と問題点” レコード・マネジメント No.44: 23~34.
- 藤本利治 1970. 『門前町』: 古今書院.
- 古田悦造 2014. 江戸の3つの「六阿弥陀参」における「武州六阿弥陀参」の特徴. 歴史地理学 269 56-2: 25~37.
- 洪 明真 2016. 江戸期における日本橋地区の商業地景観の特徴とその変容—視覚史料の分析を中心として— 観光科学研究 第9号: 67~73.
- 村山修一 1976. 『比叡山と天台仏教の研究』: 名著出版.
- 矢崎武夫 1962. 『日本都市の発展過程』: 弘文堂.
- 矢野桂司・中谷友樹・河角龍典・田中 覚 2011. 『シリーズ 日本文化デジタル・ビューコミュニティーズ03 京都のGIS』: 株式会社ナカニシヤ出版
- 矢守一彦 1984. 『古地図と風景』: 筑摩書房.
- 山崎達夫 1993. 近世前期の武蔵国廣瀬村における耕地の所有. 歴史地理学 166: 1~19.
- 山口桂三郎 1995. 『浮世絵の歴史』: 三一書房.
- 歴史地理学会 1985. 『空間認知の歴史地理』: 歴史地理学紀要 27: 古今書院.
- 山本光正 2007. 『江戸見物と東京観光』: 臨川選書.